

●学外研修報告

カナダ・カルガリー大学

における研修

教育学部教育学科教授

― 大自然の中での研究と教育 ―

西岡 正子

カルガリーは1988年冬季オリンピックが行われた地である。4月とはいえ0度近い気温と聞き、完全武装で到着すると、学生の服装Tシャツ一枚という真夏の暑さ。その一週間後には大雪に見舞われ、防寒具に身を包む。春の天気はこんなものと、誰も騒がないのが、西海岸からロッキー山脈を超えた森と草原の地カルガリーである。ロッキー山脈から吹く風で、シユヌツクと呼ばれる現象がおこり、冬もマイナス30度からプラス10度に気温が突然変化する。

大自然の営みを総て受け入れて、この地カルガリーを愛する人達は、自然

を楽しむゆつたり生きている。お陰で、研究は多くの人々の協力を得て、予想外に早く沢山スムーズに進めることができた。調査で多くの人を訪ねても、誰一人イヤな顔をせず時間をとってくれ、必要な資料や手に入りにくい資料を快く集めてくれる。研究をするにはまさに最上の地ということが出来る。

大学は常時世界中から研究者が集まってくる。学会の参加者のためのホテルも完備されている。客員教授用にも部屋が用意されており、私は2LDKの家具付きの部屋を借りることができた。その日から、ケープルを差し込めばインターネットが使える、日本の家族

と常時映像と音声を繋ぐことができた。この建物の直ぐ横にテニスコートがあり、木々の間を5分も歩けば、オリンピックが行われたスケートリンクや、室内競技場、プール等のスポーツ施設が完備しており、様々なメニューが用意されている。私はトレーナーに付いてジムで筋トレをし、プロのラケットボールプレーヤーからラケットボールを習うことにした。

スポーツだけでなく、キャンパス内の劇場やコンサートホールも充実しており、週末の音楽会には市民が集まる。この他カナダスキスの山歩きや、バンフの温泉、友人が持っている森のロッジでのファイアーを囲んだワインパーティー等々、カナダにいる間は雄大な自然を味わって欲しいという同僚や友人の心使いで週末のスケジュールはすっかり詰まってしまった。

週日は研究と、教員として参加する大学院の授業の準備で、優雅な週末とはかけ離れた生活をしなければならなかった。他の教授の授業でコメントを述べるものでさえ、こちらの院生が授業前の課題として与えられる本10冊に

関係論文30を読まなければならず、相当な時間を費やさなければならぬ。学生は、さらに宿題やプレゼンテーションが課せられ、ひたすら勉強しなければ、単位はとれない。当然、卒業は難しい。それだけに卒業式は学部を分けて丁寧にも行われる。私も客員教授だからと卒業式に参加させられた。ガウンを着せられて、スコットランドのバグパイプに先導されて行進した後、壇上に長時間座らされた。

訪れた時は、カナダ全土に起こった教育改革の嵐の真っただ中だった。一言で言えばアカデミズムの重視である。アカデミズムの高揚に向かって舵がとられ、看護学やその他の分野からは「臨床経験や現場での実績が重視されず、問題を生じている」等と批判の声がきかれた。カルガリー大学も長期計画が進行しているところであり、私の属する教育学部の大学院プログラムも改革されつつあった。改革に関しては詳細な評価が出るので、今後を見届けてゆきたい。

客員教授として参加した大学院の授業はアメリカのノースカロライナ大学

から来られた客員教授のモットー (V. Motor) 博士と一緒にさせていただいた。博士は成人教育学のなかでも教育学理論を担当されたが、講義中心ではなく、学習者主体の参加型学習を進めるその教育の技に驚嘆した。彼女はアメリカ成人教育学の第一人者であるカファレラ (R. S. Caffarella) 博士と研究を共にし、授業のテキストもカファレラとメリアン (S. B. Merrian) 共著の *Learning in Adult Education-A Comprehensive Guide* を使用していた。偶然、私も佛教大学の大学院の授業でこの本を使っていることから、意気投合し、授業の後も時間をとっていただいて、カファレラの新しい理論などを直接教授していただいた。ワインを飲みながら、博士は学問や人生観に関して情熱的に語って下さった。モットー博士と同じ授業に参加出来たことは、カナダにおける幸運の一つであった。

当初予定していた研究の他に、カルガリー日本カナダ協会の協力を得ることができ、日系2世の高齢者の生活と学習の調査をすることができた。2世

の高齢者と大阪市高齢者リーダー協議会との交流が進みつつある。私の研修から海を越えた高齢者の結びつきが生まれるのを楽しみにしている。



モットー博士 (右) と院生達 教室にて